

岐阜県の農村地域づくり

Study on Agriculture and Rural Design of Gifu Prefecture

柳田 良造

Ryozo YANAGIDA

Abstract

The aim of this study tries to analyze the agricultural feature of Gifu prefecture, for five districts-Tounou district (east district of Gifu prefecture), Tyounou district (central district of Gifu prefecture), Gifu district (Gifu city and outskirts), Seinou district (west district of Gifu prefecture), Hida district (north district of Gifu prefecture). Catching the agricultural feature of five districts, this study to approach for the new way of the rivitalizing agriculture of Gifu prefecture and rural design in the country.

Keyword : 岐阜, 農業, 農村, 環境, 地域

1. はじめに

岐阜県は地理的に日本の中央部に位置する海のない内陸県である。北は北陸、西は近畿、東は甲信越、南には岐阜県も含まれる東海地域がある。東海地域は日本の代表的な産業地域であり、愛知県を中心に自動車や電気産業などの日本の代表的な産業が集積している。産業別の就業人口割合で製造業が東海地域は26%と全国平均の17%に比べ、9%も高いことがそのことを如実にしめしている。岐阜県も製造業人口比率は25%と高く、東海地域の特徴をもったエリアの顔をもつ。しかし製造業集積の進むエリアは岐阜県南部の平野部に限られ、それ以外の大半は山地、森林地帯で多雪地でもある。

そういう中岐阜県農業は、日本の代表的な産業地域である東海地域に属する典型的な兼業農業地域である面と、一方で県面積の80%を越える中山間地域を有する面という、ふたつの顔をもつ農業であるといえよう。

2. 耕地面積

岐阜県の平成22年(2010)の耕地面積は58,000haである。県全体として林野面積率が高く(高知県について日本で2番目)、もともと山地部が多く農耕適地の少ない地形であり、県全体の面積に対する耕地面積の割合(耕地面積率)は5.5%で、全国平均の12.2%から見ても相当低く、東海3県のなかでも際だって低い(表2)。さらに平成2年(1990)の68,000haから、20年間で10,000haも減らしている。もともと耕地面積が少ない上に15%も減らしているのは大きな問題である。結果、平成22年(2010)の食料自給率は、カロリーベースで、日本全体が39%、東海3県では岐阜県が26%、愛知県が13%、三重県が44%である。耕地面積を人口で割った値(一人当たりの耕地面積)は日本全体が361㎡、東海3県では岐阜県が278㎡、愛知県が110㎡、三重県が

302㎡である。食料自給率を100%とするには、日本の本州の気候、収穫の条件下では、一人当たりの耕地面積に1,000㎡が必要であるという説がある。岐阜県の食料自給率26%になっている、その一番の要因は耕地面積の少なさである。いずれにせよ、岐阜県の食料自給率26%、この数字は東京、名古屋、大阪、京都等の大都市地域を除けば、山梨、静岡と並ぶ最も低い食料自給率の県のひとつである。また平成22年(2010)の耕作放棄地面積は5,490haに達する。

耕地面積の内訳は水田が44,400haで全体の77%を占め、全国平均の54%と比較しても水田の割合が高い。しかし、農業産出額でみると、平成21年(2009)には岐阜県の水稲の生産は241億円で、全体の1,161億円の21%であり、全国平均の22%よりも低い数字である。反収が高くなく、米の価格も低いことが要因にあげられる。岐阜県の農業産出額の内訳を見ると、トップは野菜・果実・花卉が503億円で43%を占め、続いて肉牛・乳牛・ブロイラーなどの畜産物が408億円で35%、米などの穀類が250億円で22%を占める(表3)。農業産出額は、昭和59年(1984)の1,752億円をピークに、近年減少傾向が続いている。

3. 農業が盛んな岐阜県の中山間地域

農林統計上、農業地域類型区分は4つに区分けされる。山間農業地域(林野率が80%以上で耕地率が10%未満の市町村)、中間農業地域(平地農業地域と山間農業地域の中間的な地域であり、林野率が50%~80%で、耕地は傾斜地の多い市町村)、都市的地域(可住地に占めるD I D面積が5%以上で人口密度500人以上又はD I D人口2万人以上の旧市区町村、可住地に占める宅地率が60%以上で、人口密度500人以上の旧市町村、ただし、林野率80%以上のものは除く)、平地農業地域(耕地率20%以上かつ林野率50%未満の市町村。ただし傾斜20分の1以上の田と傾斜8度以上

岐阜県の農村地域づくり

表1 国土・林野・耕地面積・人口・1人当耕地面積（出典：参考文献1.のデータを加工）

	国土	林野		耕地				人口（人）	一人当たりの耕地面積（㎡）
	総面積（ha）	林野面積（ha）	林野面積率 （林野面積/総面積）	耕地面積（ha）					
全国	37,794,651.00	24,845,302	66%	4,593,000	12.2%	2,496,000	54%	127,076,183	361
東海3県	2,064,536.00	1,434,383	69%	198,500	9.6%	135,500	68%	11,161,813	178
岐阜県	1,062,117.00	842,091	79%	58,000	5.5%	44,410	77%	2,089,413	278
愛知県	516,406.00	218,975	42%	79,100	15.3%	44,600	56%	7,218,359	110
三重県	577,687.00	373,317	65%	61,500	10.6%	46,400	75%	1,854,050	332

表2 農業産出額 平成21年（2009）（出典：参考文献1.のデータを加工）

農業産出額 平成21年(2009)																		単位：億円
区分	農業産出額	耕種										畜産						計
		米	麦類	雑穀・豆類	いも類	野菜	果実	花き	工芸農作物	種苗・苗木類その他	計	肉用牛	乳用牛	豚	鶏	その他畜産物	計	
全 国	83,162	18,044	680	773	2,089	20,876	6,984	3,506	2,434	868	56,254	5,194	7,926	5,156	7,561	535	26,371	537
東海3県	5,196	869	23	16	33	1,552	342	668	83	100	3,685	256	344	303	546	36	1,485	26
岐阜県	1,161	241	5	3	8	350	53	73	11	7	752	101	58	69	176	3	408	1
愛知県	2,976	323	9	6	17	1,039	202	554	22	46	2,219	87	229	184	223	31	753	4
三重県	1,058	305	8	5	8	162	87	41	50	47	714	67	58	50	147	2	324	20
(割合)																		
区分	農業産出額	耕種										畜産						計
		米	麦類	雑穀・豆類	いも類	野菜	果実	花き	工芸農作物	種苗・苗木類その他	計	肉用牛	乳用牛	豚	鶏	その他畜産物	計	
全 国	100%	22%	1%	1%	3%	25%	8%	4%	3%	1%	68%	6%	10%	6%	9%	1%	32%	1%
東海3県	100%	17%	0%	0%	1%	30%	7%	13%	2%	2%	71%	5%	7%	6%	11%	1%	29%	1%
岐阜県	100%	21%	0%	0%	1%	30%	5%	6%	1%	1%	65%	9%	5%	6%	15%	0%	35%	0%
愛知県	100%	11%	0%	0%	1%	35%	7%	19%	1%	2%	75%	3%	8%	6%	7%	1%	25%	0%
三重県	100%	29%	1%	0%	1%	15%	8%	4%	5%	4%	67%	6%	5%	5%	14%	0%	31%	2%

の畑の合計面積の割合が30%のものを除く。耕地率20%以上かつ林野率50%以上で、傾斜20分の1以上の田と傾斜8度以上の畑の合計面積の割合が10%未満の旧市町村）である。岐阜県の場合、図1から分かるように、中山間地域は県の中の広い範囲（83%）を占めている。平成22年(2010)の統計では、中山間地域の人口は県の27%程度だが、農家戸数では50%を占め、農業出荷額は平成18年(2006)の統計では、県全体1236億円に対して、659億円で53%を占める。市町村別でも、最も農業産出額の大きい高山市（192億円）、3番目の中津川市（91億円）、5位の瑞浪市（72億円）が中山間地域に位置する。一方都市的地域では岐阜市が115億円で2位、4位の海津市（85億円）は平地農業地域にある。このように岐阜県全体としては、相対的にみて中山間地域の農業が健闘していると言える。

4. 岐阜県の地域地区別農業

岐阜県の地域区分は東濃、中濃、岐阜、西濃、飛騨の5地域に分かれ、県の出先機関も5地域に対応した各振興局があり、県の地域行政・出先機関としての役割を担っている。しかし農業の有り様から見ると、地域内をさらにいくつか

の地区に分けた方が地域特性を反映している。

1) 東濃地域の農業

まず岐阜県を東から見ていくことにしよう。東濃地域は岐阜県東南部に位置し、中央本線に沿った地域であるが、長野県に接する恵那市と中津川市からなる恵那地区と愛知県に近い多治見市、土岐市、瑞浪市からなる東濃地区は相当様子が異なる。恵那地区には美濃地方で最高峰の恵那山があるようにその地形は丘陵地と高原からなるが、林野面積率は77%と岐阜県の中では際だって高い訳ではない。地域は農林統計上、中間農業地域に入る。一方、地形的には盆地で周辺に低い丘陵部が連なる東濃地区は、近年は名古屋圏への通勤で住宅地開発が進み、都市的地域（瑞浪市は中間農業地域）に属している。多治見市、土岐市、瑞浪市は日本の陶器生産の4割を占める有名な美濃焼きの産地である。

東濃地域の耕地面積は8,800haだが、うち水田が7,100haで81%を占め、岐阜県の中でも水田率の高い地域であり、恵那市の坂折棚田、中津川市の蛭川棚田など有名な棚田がある。しかし、岐阜県全体でも言えるように、地区の米の産出額はそれほど大きくはない。

岐阜県の農村地域づくり

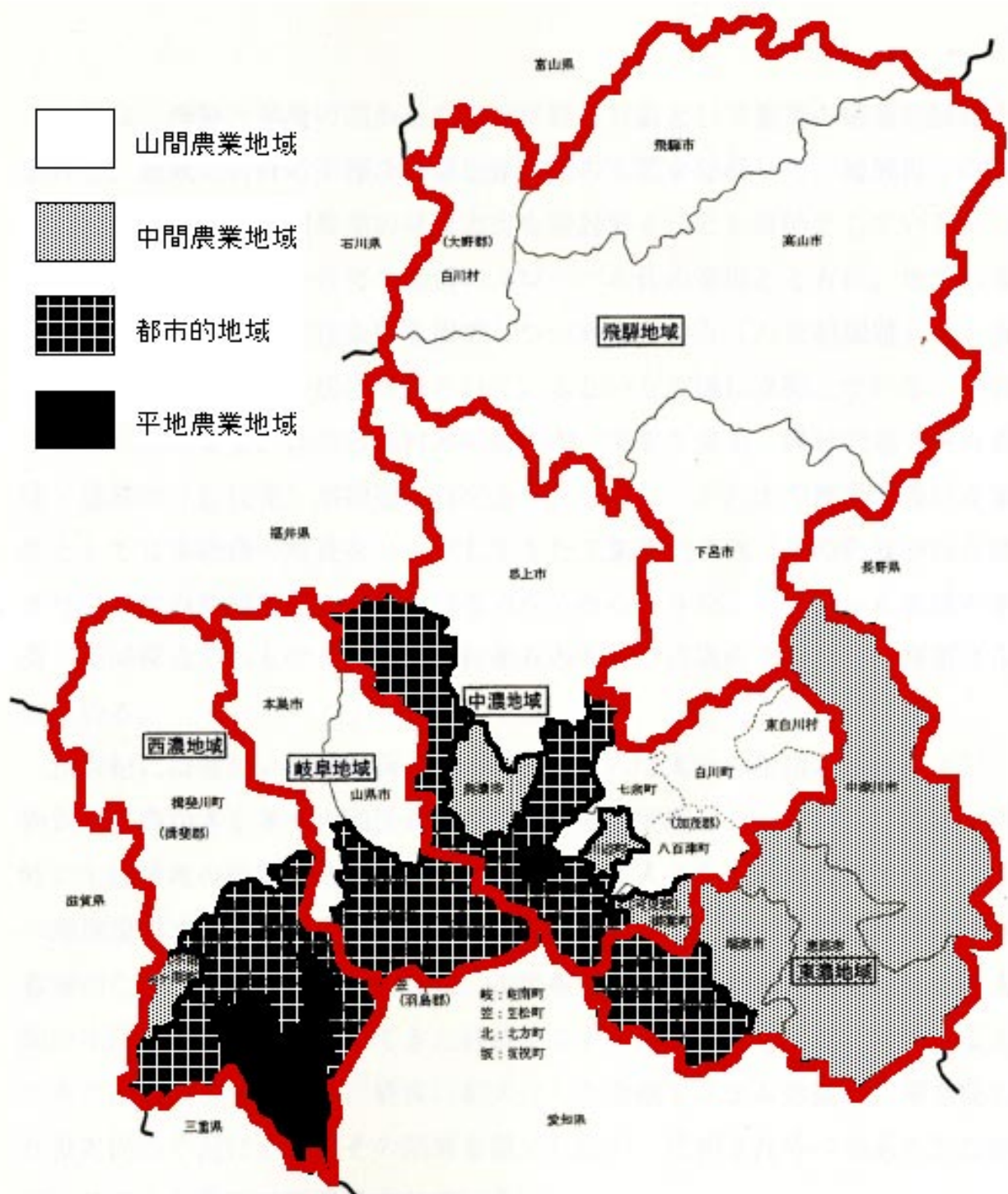


図1 岐阜県の地域区分図（出典：参考文献1.のデータを加工して作図）

東濃地域で最も農業生産額の高い中津川市で平成22年(2010)の兼業農家率は91%、農家の高齢化率は33.5%に達している。中津川市の農業地域は標高300～800mの起伏の多い中山間地域にあり、昼夜の寒暖の差が大きい。主な農作物はこの気候条件を活かした水稻、茄子・トマト等の野菜、栗(菓子としても有名)、鉢花(シクラメン栽培が盛んで全国有数の産地)、乳牛・肉牛・豚の畜産物で、農業生産額は91億円で、県内の市町村別農業生産の第3位を占める。恵那市を合わせた恵那地区全体では農業出荷額は139億円

になる。

東濃地区の出荷額は83億円であるが、大半は瑞浪市の72億円(市町村別5位)である。瑞浪市は総面積17,500haのうち、70%が林野である。瑞浪市の農業は畜産が盛んで72億円のうち、約65億円を占める。養鶏が中心だが、和牛も増加傾向にある。畜産が盛んな瑞浪市で、近年注目すべき取り組みが行われている。耕作放棄地への和牛放牧の取り組みである。平成17年(2005)に瑞浪市平山集落と北野集落で始まった取り組みは、耕畜連携水田対策事業(水田を活用し

表3 岐阜県の市町村別農業産出額 平成18年(2006) (出典:参考文献1.のデータを加工)

表3 岐阜県の市町村別農業産出額 平成18年(2006) (出典:参考文献1.のデータを加工)																				
市町村別農業生産額(平成18年)		市町村名の網色は都市的地域と平地農業地域																		
岐阜地域	西濃地域						中濃地域						恵那地域							
	西濃地区		揖斐地区		可茂地区		中濃地区													
岐阜市	11,470	大垣市	4,883	大野町	2,014	美濃加茂市	2,841	関市	4,679	郡上市	4,758	多治見市	809	中津川市	9,051	高山市	19,242	下呂市	2,496	
羽島市	2,884	海津市	8,495	池田町	1,897	可児市	1,401	美濃市	830			土岐市	333	恵那市	4,862	飛騨市	3,359			
各務原市	3,018	養老町	2,862	揖斐川町	2,685	坂祝町	704					農業産出額(百万円)								
山県市	2,482	垂井町	980			富加町	1,024													都市的地域・平地農業地域
瑞穂市	1,801	関ヶ原町	304			川辺町	484					山間農業地域・中間農業地域		62,651						
本巣市	5,013	神戸町	2,063			七宗町	245					合計		123,570						
岐南町	379	輪之内町	1,466			八百津町	863													
笠松町	263	安八町	903			白川町	987													
北方町	234					東白川村	543													
						御嵩町	656													
	27,544		21,956		6,596		9,748		5,509		4,758		8,371		13,913		22,679		2,496	123,570

た飼料作物の生産や放牧を支援する農水省の補助金制度)を活用した繁殖和牛の導入や瑞浪市の放牧地を提供する耕種農家への支援などにより、平成20年(2008)には6ヶ所に拡大している。耕作放棄地での放牧の取り組みは、筆者の論文でも取り上げたことのある「山口型放牧」が有名であるが、瑞浪市の山間地域でも取り組みが始まっているということは興味深い。東濃地域は中津川市、恵那市、瑞浪市の山間、中間農業地域で農業生産が盛んな地域である。

2) 中濃地域の農業

木曾川と長良川の上・中流域にまたがり、岐阜県の中央部を占めるのが中濃地域である。中濃地域は美濃加茂市・可児市・御嵩町・八百津町などの可茂地区、関市・美濃市の中濃地区、北部の郡上地区の3地区に分かれる。うち可茂地区の南側の木曾川沿いに位置し、美濃加茂市・可児市・坂祝町は地形的にも平野部が開け、もともとの水田地帯が現在は市街地と製造業が混在する都市的地域になっている。一方、東側の八百津町・川辺町・七宗町・白川町などは山間農業地域(御嵩町は中間農業地域)であるように、この地区は都市部と山間地域が併存するエリアである。中濃地区の関市・美濃市は長良川流域にあり、伝統産業として関市の刃物金属加工業、美濃市の美濃紙は有名である。関市は都市的地域、美濃市は中間農業地域に属する。長良川の上流の郡上市八幡町は城下町としての歴史と長良川と支流の吉田川の清流が街の中を流水を活かした街づくりで有名なところである。

中濃地域の全耕地は11,497haであるが、耕地面積率4.7%と低い。可児市・美濃加茂市・坂祝町などの都市的地域の耕地面積率は11%から18%と高い値を示すが、これらのエリアは面積が小さいため、大半のエリアを占める山地エリアでは耕地面積率が低い。ちなみに山間地域の郡上市で

は2.9%で、水田面積は8,178haで、水田面積率は71%である。

農業生産額で見ると、可茂地区の出荷額は97億円で、主な生産物は水稲とトマト、葱などの野菜、梨、茶などである。中濃地区は55億円で、主な生産物は米とさといもとプロイラー、豚の畜産である。郡上地区は48億円で、米の他、大根、にんじん、いちごと、切り花、乳牛と肉牛、鮎も有名である。

郡上市は平成の合併で八幡町・白鳥町・高鷲村・明宝村など7町村の合併で誕生し、高山市に次いで広い市域を有している。林野面積率も90%に達する山間地域で、北部は長良川の源流で多雪地帯である。最北部の旧高鷲村は「開拓」をめぐる3つの歴史上の事件で有名である。最初が明治34年(1901)に北海道の下川町の開拓が岐阜県高鷲村からの入植団25戸によってはじめて、開墾の鉞が下ろされたということ。2番目が昭和15年(1940)、高鷲村の当時の全農家600戸の内、1/3の200戸を移民する計画を立て、高鷲満蒙開拓団として満州原野に入植し123戸641人が満州に渡ったこと。3番目が昭和20年(1945)の敗戦後、満州から110戸351人が引き上げ、緊急開拓措置法により高鷲村蛭ヶ野地区での開拓事業に入植することになったことである。高鷲村は日本近代の中でも希な「開拓」の地域史をもつ場所である。蛭ヶ野地区は長良川の源流地域で標高900~1000m、湿原と原野の土地である。戦後開拓は苦闘の末、酪農と冷涼な気候を利用した大根(ひるがの大根)を生み、スキー場などの観光施設も作り出すことになる。蛭ヶ野地区には現在もミズバショウなどの咲く湿原の保存地区が残されている。八幡町を囲む旧町村は、高鷲村以外にも畜産とハム生産で有名な明宝村、白山信仰で古い歴史をもつ土地で高原の気候を活かしたトウモロコシや近年ではホオヅキのジャムな

岐阜県の農村地域づくり

岐阜地域						西濃地域											
市町村名	総面積 (ha)	林野面積 (ha)	耕地面積 (ha)	水田面積 (ha)	畑面積 (ha)	市町村名	総面積 (ha)	林野面積 (ha)	耕地面積 (ha)	水田面積 (ha)	畑面積 (ha)	市町村名	総面積 (ha)				
岐阜市	20,289	5,976	4,070	3,040	1,030	(西濃地区)						美濃加茂市	7,481	2,980	1,320	812	505
羽島市	5,364	0	2,070	1,650	422	大垣市	20,652	10,873	3,080	2,860	226	可児市	8,760	3,524	948	753	195
各務原市	8,777	1,828	1,580	682	893	海津市	11,231	3,032	3,750	3,120	627	坂祝町	1,289	467	233	129	104
山県市	22,204	18,622	1,190	901	289	養老町	7,214	1,828	2,680	2,480	197	富加町	1,682	654	371	270	101
瑞穂市	2,818	0	999	722	277	垂井町	5,714	3,295	1,060	931	126	川辺町	4,118	2,893	281	190	91
本巣市	37,457	31,912	1,950	1,340	613	関ヶ原町	4,929	3,804	301	265	36	七宗町	9,047	8,139	224	145	79
岐南町	790	0	202	110	92	神戸町	1,877	0	872	743	129	八百津町	12,881	10,307	553	384	169
笠松町	1,036	0	211	151	60	輪之内町	2,236	0	1,150	1,020	130	白川町	23,789	21,024	776	486	290
北方町	517	0	140	94	46	安八町	1,819	0	797	644	153	東白川村	8,711	7,833	284	140	144
小計	99,252	58,338	12,412	8,690	3,722	小計	55,672	22,832	13,690	12,063	1,624	御嵩町	5,661	3,364	475	386	89
						(揖斐地区)						小計	83,419	61,185	5,465	3,695	1,767
						大野町	3,418	549	1,210	866	344						
						池田町	3,879	1,563	1,050	914	140						
						揖斐川町	80,368	73,116	1,780	1,400	378	関市	47,284	38,319	2,570	2,020	545
						小計	87,665	75,228	4,040	3,180	862	美濃市	11,705	9,227	482	283	199
												小計	58,989	47,546	3,052	2,303	744
												郡上市	103,079	92,428	2,980	2,180	798
計	99,252	58,338	12,412	8,690	3,722	計	143,337	98,060	17,730	15,243	2,486	計	245,487	201,159	11,497	8,178	3,309
岐阜地域						西濃地域											
市町村名	総面積	林野面積割合	耕地面積割合	水田面積割合	畑面積割合	市町村名	総面積	林野面積割合	耕地面積割合	水田面積割合	畑面積割合	市町村名	総面積	林野面積割合			
岐阜市	100%	29%	20%	75%	25%	(西濃地区)						美濃加茂市	100%	40%	17.6%	62%	38%
羽島市	100%	0%	39%	80%	20%	大垣市	100%	53%	15%	93%	7%	可児市	100%	40%	10.8%	79%	21%
各務原市	100%	21%	18%	43%	57%	海津市	100%	27%	33%	83%	17%	坂祝町	100%	36%	18.1%	55%	45%
山県市	100%	84%	5%	76%	24%	養老町	100%	25%	37%	93%	7%	富加町	100%	39%	22.1%	73%	27%
瑞穂市	100%	0%	35%	72%	28%	垂井町	100%	58%	19%	88%	12%	川辺町	100%	70%	6.8%	68%	32%
本巣市	100%	85%	5%	69%	31%	関ヶ原町	100%	77%	6%	88%	12%	七宗町	100%	90%	2.5%	65%	35%
岐南町	100%	0%	26%	54%	46%	神戸町	100%	0%	46%	85%	15%	八百津町	100%	80%	4.3%	69%	31%
笠松町	100%	0%	20%	72%	28%	輪之内町	100%	0%	51%	89%	11%	白川町	100%	88%	3.3%	63%	37%
北方町	100%	0%	27%	67%	33%	安八町	100%	0%	44%	81%	19%	東白川村	100%	90%	3.3%	49%	51%
小計	100%	59%	13%	70%	30%	小計	100%	41%	25%	88%	12%	御嵩町	100%	59%	8.4%	81%	19%
						(揖斐地区)						小計	100%				
						大野町	100%	16%	35%	72%	28%						
						池田町	100%	40%	27%	87%	13%						
						揖斐川町	100%	91%	2%	79%	21%	関市	100%	81%	5.4%	79%	21%
						小計	100%	86%	5%	79%	21%	美濃市	100%	79%	4.1%	59%	41%
												小計	100%				
割合	100%	59%	13%	70%	30%	割合	100%	68%	12%	86%	14%	割合	100%	82%	4.7%	71%	29%
市町村名	総面積 (ha)																
計	156,282	116,184	8,818	7,099	1,724	計	417,759	368,350	7,553	9,656	4,247						
市町村名	総面積	林野面積割合	耕地面積割合														
割合	100%	74%	6%	81%	20%	割合	100%	88%	2%	128%	56%						

表4 岐阜県の市町村別総面積・耕地面積・水田面積・畑面積 平成22年7月15日現在 (出典：参考文献1.のデータを加工)

どの産品づくりに取り組む白鳥町石徹白地区など、特色をもった農業生産が行われている農村集落が多い。

3) 岐阜地域の農業

中濃地域と西濃地域に挟まれたエリアが県都岐阜市とその周辺地域からなる岐阜地域である。地形的には南部は長良川、木曾川の中流、下流域の平坦地で、岐阜市の北側の山県市、本巣市は山間地域であり、福井県境まで山地が続く。岐阜地域の農業生産高は275億円と高く、特に岐阜市は115億円で、市町村別で高山市について第2位である。岐阜市は耕地面積も広く、高山市、中津川市に次いで第3位で4,070haあるが、どこに一体それだけの農地があるのだろうかと思う。まとまった農地は、ほとんどなくわずかに岐阜市北側の山沿いのエリアに、数えるほどである。大半はスプロールした市街地に細切れになって存在する。その面積は1反、2反から数十坪程度まで、住宅やアパート、商店、コンビニ、学校などの間に水田や畑があり、水稲や枝豆、ほうれん草、だいこん、にんじんなどの野菜が植えられている。ところどころ、水田が転用された柿畑、ブドウ畑なども見られる。全体ではやはり水田の面積が広く3,040haで耕地面積全体の3/4を占める。

岐阜地域の主な農業産品は岐阜市や各務原市の都市部では兼業農家が大半で集落営農も進む水稲と、消費地に近い地の利を活かした、ほうれん草や、枝豆、だいこん、にんじん等の野菜、莓等の果実の生産である。羽島市、瑞穂市など都市近郊地域では、次項の西濃地域の海津市での事例で述べるような、集落営農と農地の利用集積を進めた水稲、麦、大豆の2年3輪作の展開が図られている。また北部の本巣市、山県市では水稲の他、富有柿やナシ等の果実、切り花、鉢花がある。

4) 西濃地域の農業

西濃地域は揖斐川以西の地域で大垣市とその南部地域は揖斐川、長良川の両河川の下流域の平野が広がり、西は滋賀県との境まで続く西濃地区と、北部に急峻な山地の続く、山間地域の揖斐地区に分かれる。西濃地域は耕地面積が17,730haあり、5地域の中で最も広く、主な産品は米、大豆、小麦に、トマト、キュウリ、小松菜、ピーマン等の野菜類、切り花、鉢花である。

地区毎に特徴的なエリアを紹介しながら地域農業を見てみたい。西濃地区はその大半が揖斐川、長良川の下流に位置する沖積平野にあるため耕地面積率が基本的に高く、輪之内町、安八町、神戸町などでは耕地面積率が50%近くまで達する。その中で最も南にあり揖斐川、長良川、木曾川の三大河川が合流する位置にある海津市は市域の面積が11231

ha、耕地面積率が37%あり、耕地面積は3,750haで市町村別では高山市、中津川市、岐阜市について4番目の広さがある。古来この地は三大河川が運んだ肥沃な沖積土に覆われた土地であるが、標高が海拔0~4mと低いため、以前は土を盛り上げて作った「堀田」と呼ばれる田で、田舟（この舟に農具、弁当や苗を乗せ、また刈り取った稲の積み、田と家を往復する交通手段として使われていた。）を利用した米づくりが行われていた。戦後、三大河川の合流するデルタ地域での排水施設の整備が始まり、地域農業の特徴であった「堀田」の埋め立て・消失が進むとともに、昭和55年(1980)からは、再圃場整備事業も行われ、1~2haの区画の大規模な水田が出現し、地域の農業は様変わりする。昭和58年(1983)には、水田作業の全面受託を行う地域営農組合が誕生する。地域営農組合は平成4年(1992)頃には法人化するものも出始め、規模の拡大を図り、特に福江営農などは平成17年(2005)には受託面積で水稲80ha、小麦143ha、大豆143ha、水稲の部分作業受託240haの規模になり、岐阜県でも最大規模の地域営農組合に成長する。その営農の内容は、従来から海津市で一般的であった水稲単作から、大区画圃場の利点と大型機械の作業効率性を活かし、収量・品質の高い水準での維持をめざした、水稲-小麦-大豆の2年3輪作の大系を確立している。

揖斐地区は南部の大野町、池田町は都市的地域に属するが、北部の揖斐川町は山間農業地域に属し、その地域性はかなり異なる。揖斐川町は林野率が91%に達し、耕地面積率はわずかに2%にすぎないが、市域全体の面積が広いため、耕地面積自体は1,780haあり、大野町の1,210ha、池田町の1,050haよりも大きい。揖斐川町の主要な農作物は水稲の他、戦国時代からその存在を知られる揖斐川町春日地区の薬草、久瀬地区の小菊などが良く知られる他、山間地区の斜面を利用した茶（美濃揖斐）の栽培も盛んである。南部の大野町は富有柿の主要産地であるとともに、バラ苗の生産量が日本一と言われる。青いバラの育種にも取り組み、大野町で作出された「ブルーヘブン」は一世を風靡した。池田町では農事組合法人の白鳥ファームが清流に囲まれた美しい環境の中で「楽しくやろう農業を」をモットーにエコファーマーの認定を受け、化学肥料・農薬50%削減して安全、安心な「夢ごこち」、「はつしも」等の米作りを進めている。

5) 飛騨地域の農業

飛騨地域は美濃地域の北に位置し、全体的に山地が続く中、盆地に市街地が位置する。高山市や白川村に代表される歴史的町並が有名な地域でもある。高山市を中心とする飛騨地区と、下呂市の下呂地区に分かれる。飛騨地方の農耕地面積は7,553haで岐阜県全体の13%であるが、そのうち野菜

岐阜県の農村地域づくり

の作付け面積は約25%で、県全体の2倍以上で、気候条件を活かした高冷地野菜の産地で、ほうれんそうやトマトの出荷が盛んである。飛騨地区全体では農業生産額は227億円、主な産品は高山市周辺の夏ほうれんそうや夏秋トマトなど高冷地野菜に加え、畜産物での飛騨牛はブランド品となり、アジア向けの輸出も始まっている。また下呂地区は25億円で、同じくトマト、葱、肉牛等がある。

高山市は耕地面積4,780ha、農業生産高192億円と市町村別でいずれも第一位である。高山市は自体が合併(10市町村の合併)で非常に面積が広がったことがその要因のひとつにあげられるだろうが、飛騨地区はほぼ全域が山深い地域である。このことを考えれば、この山間地区の飛騨地区は最も岐阜県でも農業の盛んなエリアのひとつであるといえる。高山市で見ると農家戸数は平成17年(2005)が専業農家率8.7%、第1種兼業農家率12.1%で、いずれも県の平均6.7%、3.9%をかなり上回っている。また、認定農業者数(経営体)は平成21年(2009)に573で、岐阜県全体の26%を占める。

高山市の農業生産額は水稲の生産額は減少傾向にあるが、涼しい気候(北海道南部の気候に近い)を活かして栽培される高冷地野菜が半分近くを占める。なかでもトマト、ほうれん草の2品目が野菜販売の大半を占め、ソバ、トウモロコシ、ネギなども各地で生産されている。また桃やりんご等果樹の生産も盛んである。

高山市の北に接する旧丹生川村(にゅうかわむら)は、トマト産地(飛騨トマト)として有名なところである。大阪方面に出荷されるトマトのほとんどは丹生川村地区のものであると言われる。旧丹生川村にてトマトづくりを行っている典型的な農家を紹介したい。農園の農地は80アール(0.8ha)あり、1枚20アールの水田を4枚転作したもので、中央に小川が流れる傾斜地にある。傾斜地なので、等高線に沿ってトマト用のビニールハウスが50アール分建っている。夏秋トマトの収穫の最盛期は8月で、夏のハウスの中は日中40度以上になるので、収穫は早朝と夕方にかけて行われる。50アールのハウスの中には高さ4mに育った13,000本のトマトがある。手入れや収穫はすべて手作業であり、トマト栽培は機械化や省力化ができない労働集約型の農業である。

飛騨地方でのトマト栽培は昭和20年代から始まり、昭和40年代には全国に先駆けて「雨よけハウス」による栽培を導入し、質の良い夏秋トマトの産地としての地位を確立した。日本の中でも最も大きなトマト産地のひとつで、長い歴史をもつため、親子三代にわたってトマト生産を続ける農家もある。現在、約370戸の農家が130haで栽培し、年間260万ケース(4キロ詰め)出荷している。飛騨トマトの歴

史を見ていると、以前調査したことのある夕張メロンの歴史と重なるところがあることを思い出す。夕張メロンもその栽培が始まるのは、戦後昭和20年代から試みられ、長年の品種改良と交配の研究から昭和35年(1960)になり、ネットが完全に外観を多い、肉質がサーモンピンクで、糖度、風味とも素晴らしい「夕張キング」を生み出し、夕張でのメロン栽培の方向づけを確立する。現在、夕張でのメロン農家の農地規模は平均5ha(北海道の平均は22ha)と決して大きな規模ではないが、ブランド化したメロン生産で高い収益性をあげ、3代続くメロン農家も出現しているのである。

合併した高山市の中でもうひとつ地域事例を見てみよう。高山市の西部、福井県と接する白山山地に沿った高原状の山間地で、日本海に下る庄川の源流域の旧荘川村である。旧荘川村は明治8年(1875)に飛騨国白川郷が二分され、上白川郷と呼ばれていた地域が荘川村に、下白川郷が白川村になったところである。地域は平地でも標高800m以上あり、冬は有数の多雪地帯である。古くから豊かな地域ではなく、山稼ぎと焼き畑などによる小集落が形成されていたが、明治以降は林業や養蚕、新田開発などを行ってきた。近年は高冷地野菜産地としてキャベツ・ほうれん草栽培やソバ栽培や、飛騨牛の生産なども進めているが、旧丹生川村のトマトのようなブランドした産品を生み出すような農業には至っていない。

5. まとめ

本稿は岐阜県の農業を地域・地区区分から概要を描くとともに、地域的に特徴ある地域農業を描き出そうとしたものである。靴の上から足を搔いているような感覚がどうしてもあり、十分に実態を描きだせたかというところもたない気もするが、そういう中でもいくつか浮かび上がった点を最後に記しておきたい。本稿執筆の問題意識として、地域農業と地域の工業や都市計画、地域計画との積極的な関係性を問うという視点があるが、その視点から地域農業のポイントを拾うと、まず地域の農家がどこから所得の糧を得ているかの問題があげられる。岐阜県では主業農家(農家所得の50%以上が農業所得で65歳未満の農業従事60日以上の方がいる農家)の割合が9%で、全国平均の22%と比べてその割合が非常に低い。一方、隣の愛知県は23%で全国平均である。岐阜県内で都市地域・平地農業地域と中山間農業地域で見ても、8%、9%で大きな差はなく、いずれも低い。結果、農外所得が主で65歳未満の農業従事60日以上の方がいない副業的農家の割合が岐阜県は72%になり、全国平均の54%と比べても非常に高く、岐阜県は全体で、農家の大半が副業的農家であることがわかった。そう

表5 主業農家・準主業農家・副業農家の割合 2010年世界農林業センサスによる
(出典：参考文献1.のデータを加工)

	計(戸)	主業農家	65歳未満の農 業先住者がい る	準主業農家	65歳未満の農 業先住者がい る	副業的農家
全 国	1,631,778	359,896	308,820	388,909	137,382	882,973
東 海 3 県	76,602	13,380	11,519	18,116	6,297	45,106
岐 阜 県	36,362	3,108	2,479	7,228	1,942	26,026
愛 知 県	43,632	10,162	9,163	10,318	4,338	23,152
三 重 県	32,970	3,218	2,356	7,798	1,959	21,954
岐阜県都市平地農業地域	18,853	1,447	1,107	3,570	947	13,836
岐阜県中山間農業地域	17,509	1,661	1,372	3,658	995	12,190
	計(%)	主業農家	65歳未満の農 業先住者がい る	準主業農家	65歳未満の農 業先住者がい る	副業的農家
全 国	100%	22%	19%	24%	8%	54%
東 海 3 県	100%	17%	15%	24%	8%	59%
岐 阜 県	100%	9%	7%	20%	5%	72%
愛 知 県	100%	23%	21%	24%	10%	53%
三 重 県	100%	10%	7%	24%	6%	67%
岐阜県都市平地農業地域	100%	8%	6%	19%	5%	73%
岐阜県中山間農業地域	100%	9%	8%	21%	6%	70%

いう中で、飛騨地域の高山市は主業農家の割合が24%、西濃地域の海津市は19%と例外的に高い。それは5-2)の販売農家1戸当たり生産農業所得から見た市町村類型の分析と一致する。このように岐阜県内では大半の地域で、農業は副業的に行われ、農家の人たちは地域の様々な職場に勤めて主たる家計の収入を得えながら、先祖代々の土地を耕し、水稲や野菜、果樹などを栽培し、副業的収入を得ていることがわかる。つまりは地域の工業や都市計画の関係は、地域農業の担い手に主業の収入を確保する働き場をつくり出してきたものであるとまずいえる。しかし、岐阜県という大消費地にも近い地の利を十分に活かし、都市をターゲットにした収入をあげられる農業の構築は、高山市の「飛騨トマト」や海津市の大規模機械方式による水稲-小麦-大豆の輪作方式など、数えるほどしかその成果を見いだせていない。

2番目が土地の条件や気候など、地域の農業にとっての基盤となるものの問題である。農業にとって土地の条件や気候など、地域的に問題を抱えるエリアはその改良や改変が都市計画や農村計画の課題となる。高原の湿地や原野に戦後開拓に入った高鷲村蛭ヶ野地区や、大河川下流の低湿地に排水設備を整え大区画の圃場を生み出した海津市での取り組みなどはそのケースである。一方、飛騨地方の丹生川村の飛騨トマトの取り組みなどは傾斜地と冷涼な気候という、けっして恵まれているとは思えない土地で、大きな基盤的整備はなくても個々の農家レベルでその条件を時代の流れや環境の中でうまくプラスに転化し、質の高いブランド野菜を生み出したケースもある。しかし、同じ飛騨でも庄川村のように、地形条件や気候条件等があまりに厳しく、なかなか豊かな産物を生み出す時代がこないようなエリアもあ

る。基盤整備や何らかのサポートが地域農業の活性化に必ずしも必要不可欠のものとは思われない。地域の開発や計画が土地の値上がりや開発利益を期待させるようなものになるのではなく、地域農業の担い手にとって農業的モチベーションを高めるものであらねばならない。

3番目は今回調査してみても実感した岐阜県の農業が予想以上にふるわないということである。確かに高山市の飛騨トマトのように、

日本有数のトマト産地として質的にも高いものを生み出しているエリアもある。しかし、それは山深い飛騨の山間地の農業であって、条件はけっして恵まれた場所ではない。長良川や揖斐川の中下流域には、条件の恵まれた農地は多くあるが、そこからはなかなか、魅力的な農業、農村地域づくりの姿は残念ながら見えてこない。岐阜地域の農業のところで記したように、平野部の農地はスプロールした中に細切れに点在する。その風景は郊外開発の無秩序化とあいまって、まったく美しくない。一方郡上市や高山市などの山間地域には今も美しい集落がいくつもあり、訪れる度に魅力的な景観を楽しませてくれる。雑多な郊外風景のなかに残る農地の姿からは、残念ながら魅力的な農業は生まれえないと思う。細切れでも農地が残るだけよいではないかと声もあろう。今、日本で唯一地域の農業が主業農家のみで支えられる北海道の農村は、田園地帯の景観がなにより美しい。うねるような丘陵地の畑が映像化され、田園地帯そのものが観光地にもなっている美瑛や富良野をはじめ、北海道の至るところの農村風景が防風林や耕地、山並みや川の景観と一体となり美しい。長い年月はかかるであろうが美しい農村風景の再構築から出発するしか日本の地域農業の再生の道はないように思う。

参考文献

1. 農林水産省『平成21～22年 第57次東海農林水産統計年報・東海農政局統計部』平成23年3月
2. 岐阜農林統計協会『岐阜県農業累年統計書昭和35年～平成19-1960～2007-』平成21年11月